
着装、着装場面、性別による心理的变化に関する調査

A Study on Psychological Change Caused by Clothing, Gender and Situation

松原 詩緒

Shio Matsubara

要旨

着装場面と着装による心理状態の変化について検討した。着装場面に合った着装をしているときには肯定的な変化が、逸脱したときには否定的な変化がみられると仮説1を立てた。女性の方が男性よりファッションに対する意識が高いことから、心理状態の変化量は女性の方が大きいと仮説2を立てた。そして着装場面で重視される要因から逸脱あるいは適合しているときに変化量は大きくなり、そうでないときは小さくなると仮説3を立てた。分析の結果、一部を除き仮説1は支持された。心理状態の変化量は男女で変わらず、仮説2は棄却された。懸念や対人的疎外感が大きく変化したのは社会的規範から逸脱した着装のときであり、そこに着装場面の限定はなかった。そのため仮説3は棄却された。男性は個人的嗜好を重視する場面でも社会的規範から逸脱した着装を提示されたときに緊張が大きく高まっており、着装場面に問わず着装が社会のルールから逸脱しているときに否定的な変化が起こることが示唆された。一方で女性は個人的嗜好に合った着装のときに肯定的な変化がみられる傾向があった。今後、実際に着装場面や着装を提示しさらなる検討をする必要があるだろう。

●キーワード：被服行動 (clothing behavior) / 着装場面 (scene of clothing) / 性差 (gender difference)

I. 目的

本研究の目的は、着装と心理状態の変化の関係について検討することであった。着装には、単に身体を守るだけでなく様々な目的やそれに伴う影響が存在する。たとえば他者に自身をアピールすることや、気分、自己評価と関わりがあると考えられる。鈴木 (2006) が女子大学生を対象に調査をしたところ、衣服の購入と賞賛獲得欲求に弱い正の関係がみられた。また高齢者を対象にした上野・箱井・小林 (2002) の研究では、ファッションショーに参加した後に「楽しかった」「生きる力を実感した」などの心境を語ったことが示されている。着装によるポジティブな結果がみられた一方で、地味な服を着て近所に外出する場面では行動意欲が抑制される結果も示された (箱井・上野・小林, 2001)。このように着装は人が社会で生活する上で、気分や感情と密接に関係していることが考えられる。また着装には、その着装をする場面が係わると考えられる。着装には、個人の嗜好がそのまま反映されるのではなく、就職活動のように求められる色やデザインがある程度定められていることがある。本研究では着装と着装場면을キーワードに、着装に

よる心理状態の変化の特徴を捉えることを目指した。なお、着装には性差が見られる (福岡・高木・神山・牛田・阿部, 1998; 安永・野口, 2012) ことが指摘されているため、この点もあわせて検討を行った。

着装と着装場面については福岡ら (1998) や牛田・高木・神山・阿部・福岡 (1998)、阿部・高木・神山・牛田・辻 (2000)、牛田・高木・神山・阿部・辻 (2000)、辻・高木・神山・阿部・牛田 (2000) の一連の研究でもふれられている。そこでは着装場面のフォーマル性に着目しており、フォーマル場面と着装の社会的調和に正の相関がみられることや、インフォーマル場面と着装の個性・流行に正の相関がみられることが示唆されていた。松原 (in press) の調査でも同様の結果がえられており、フォーマル性の高い場面では社会的規範が重視され、フォーマル性の低い場面では実用性や個人的嗜好が重視されていた。なお福岡ら (1998)、牛田ら (1998)、阿部ら (2000)、牛田ら (2000)、辻ら (2000) の社会的調和と松原 (in press) の社会的規範はいずれも「伝統やしきたりに合っている」や「場所柄や雰囲気合っている」などの質問で構成されており、場所やしきたりと

いった社会的な規範に対する意識を指していた。着装と着装場面については、統計的な検討はなされていないものの、中川（1986）や内藤・小林（2001）でも類似した結果がえられている。中川（1986）の研究では、結婚披露宴や謝恩会、就職面接などの公的な場面で社会的規範や周囲からの好ましい評価を考慮する傾向がみられた。内藤・小林（2001）でも結婚式などの場では社会的調和と規範の因子が高い傾向を示した。

性差については以下の研究がある。福岡ら（1998）や安永・野口（2012）では、女性の方が男性よりファッションに対する関心が高いことが述べられている。松原（in press）でも、男性より女性の方が着装に関する意識が高いとの結果がえられている。また男性よりも女性の方が着装によって大きく感情が変化しているとの指摘もある（箱井ら，2001）。

本研究では着装と着装場面による心理状態の変化に着目した。これまでの研究では条件を提示した後の心理状態をたずねるものが主で、着装の提示前と後を比較したものはあまり多くない。そこで今回は着装場面と着装を提示する前後の心理状態を測定し、その変化量について検討した。鈴木（2006）や箱井ら（2001）、上野ら（2002）の研究では、着装を提示した後にポジティブな値がえられることも、その逆もみられた。本研究では着装場面に合った着装と逸脱した着装を提示し、前者では心理状態の肯定的な変化が、後者では否定的な変化がみられると考えた（仮説1）。また、女性の方がファッションに関する意識が高く、感情の変化が大きいことから、心理状態の変化量は女性の方が大きいと仮説を立てた（仮説2）。そして最後に、着装と着装場面に注目した。着装場面ではいくつかの着装基準が存在すると考えられる。松原（2015a, b, 2016; Table1）によると着装には、社会的規範、社会的調和、流行、個人的嗜好、印象管理、実用性の6つの基準が存在する。これらの基準は着装場面により重視される程度が異なることが考えられる。そこで、重視される着装基準から逸脱あるいは適合した着装をしている際には心理状態の変化量が大きくなり、そうでない着装基準からの逸脱あるいは適合した着装をしていても変化量は小さいと考え、これを検討した（仮説3）。

本研究では具体的な着装場面を抽出するために予備調査を行った。本調査では抽出された着装場面と着装を提示し、具体的に想像するよう求めた。そして着装場面と着装が提示された前後の心理状態を測定し、変化量を算

出した。なお今回は20代から30代の社会人を調査対象とした。着装に対する関心は若年層の方が高く、着装基準尺度に社会に関する内容が含まれているためである。着装と着装場面による心理状態の変化の大きさを知ることができ、どの要因が大きな影響を持つのかを把握することができる。着装と心理状態に強く関わる要因が明らかになれば、着装と心理状態の関係を明らかにする一助となるだろう。

II. 予備調査

1. 方法

調査対象

20代から30代の社会人50（男24、女26）名だった。平均年齢は35.02（SD3.05）歳だった。

調査日

2017年5月

手続き

リサーチ会社への委託によるインターネット調査を行った。6つの着装基準を重視する場面を抽出するため、提示された教示文から思い浮かべられた具体的な場面について回答を求めた。教示文は松原（2015a, b, 2016）の着装基準尺度の質問項目を参考に作成した。

Table1 着装基準尺度

社会的規範	周りの人に対して礼儀や品位を表した衣服を着用する 常識やしきたりに従った衣服を着用する その場における自分の立場にふさわしい衣服を着用する 周囲に受け入れられるような衣服を着用する
社会的調和	多くの人が持っている衣服を着用する 周囲の人と同じような衣服を着用する 周囲の人が着ているのと類似した衣服を着用する 周囲の人を参考に衣服を選び、着用する
流行	流行している色・柄を選び着用する 流行に合う衣服を着用する 流行の素材を使っている衣服を着用する ファッション雑誌を参考に服装を選ぶ
個人的嗜好	自分の好みに合った衣服を着用する 自分の好きな色やデザインの衣服を着用する 気に入った服を着用する
印象管理	自分を引き立てる衣服を着用する 自分らしさを表現するような衣服を着用する 自分をより良くみせるデザインを着用する スタイルがよくみえる衣服を着用する
実用性	洗濯や手入れが簡単な衣服を着用する 着心地が良い衣服を着用する 体に良くあって動きやすい衣服を着用する 耐久性のある衣服を着用する 暑さ寒さの調節しやすい衣服を着用する

分析方法

それぞれの着装基準に対し、集められた回答を集計した。なお類似した回答は同一のものとして数えた。

2. 結果

えられた回答を着装基準ごとにまとめたものが Table 2 から 7 である。社会的規範を重視する場面を想像してもらったところ、結婚式や葬式、通夜といった冠婚葬祭に関する場面を思い浮かべたのが 38 名であり、全体の 76.00% を占めた。

社会的調和を重視する場面では、社会的規範と同じ冠婚葬祭という回答が 34.00% にあたる 17 名からえられた。一方で職場、研修、面接、会議といった仕事に関わる場面を合わせると 14 名で全体の 28.00% になった。

流行を重視する場面についてはさまざまな回答がえられた。内容に注目すると、人が多く他者の目がある、あるいは他者と関わりのある場面が多くみられ、デート、パーティー、飲み会や食事会、繁華街や都会、女子会、合コンを合わせると全体の 66.00% を占めていた。

個人的嗜好を重視する場面でも多様な回答がえられたが、ショッピング、レジャー、デート、自宅、休日、旅行、パーティー、合コン、友人との食事、アウトドアといった余暇活動が主に挙げられており、これらを合計すると全体の 79.59% を占めていた。

印象管理を重視する場面では、流行と類似した結果がえられた。ただしデート、合コン、食事、面接、女子会、友人と会うといった具体的な対象との交流を想定した回答が 54.00% と過半数を占めた。

実用性を重視する場面では自宅、仕事、普段、近所への外出という社会人における日常生活に回答が集中した。上記で全体の 80.00% であった。

予備調査では、着装基準に即した具体的な着場面抽出を目的とした。調査の結果、社会的規範を重視するのは冠婚葬祭の場面だった。社会的調和を重視するのは冠婚葬祭も含め、職場などの公的な場面だった。流行を重視するのは繁華街やパーティーなどの人の多い場面だった。個人的嗜好を重視するのはショッピングやレジャーなどの余暇活動場面だった。印象管理を重視する

Table2 社会的規範場面の回答

回答	人数
冠婚葬祭	38
レストラン	4
パーティー	2
面接	2
目上の方との食事	1
コンサート	1
式典	1
正月	1

Table3 社会的調和場面の回答

回答	人数
冠婚葬祭	17
職場	10
式典	8
コンサート	4
スポーツ	2
レジャー	2
研修	2
面接	1
会議	1
いろいろな人が集まる時	1
参観日	1
ショッピング	1

Table4 流行場面の回答

回答	人数
デート	8
パーティー	8
飲み会、食事	7
繁華街、都会	6
普段	3
レジャー	3
女子会	2
旅行	2
合コン	2
コンサート	2
テーマパーク	2
ショッピング	2
冠婚葬祭	1
通勤	1
プライベート	1

Table5 個人的嗜好場面の回答

回答	人数
ショッピング	12
普段	7
レジャー	6
デート	5
自宅	5
休日	4
旅行	3
デパート	2
就寝	1
パーティー	1
合コン	1
友人と食事	1
アウトドア	1

Table6 印象管理場面の回答

回答	人数
デート	13
パーティー	8
合コン	5
食事	5
冠婚葬祭	4
仕事	4
面接	2
クラブ	2
式典	1
ショッピング	1
女子会	1
面白い	1
ハレの場	1
友人と会う	1
休日の外出	1

Table7 実用性場面の回答

回答	人数
自宅	17
仕事	16
普段	4
軽度の作業	4
近所への外出	3
運動・アウトドア	2
公園	1
レジャー	1
ショッピング	1
梅雨	1

のはデートなど他者と交流のある場面だった。実用性を重視するのは自宅などの日常の生活場面だった。

本調査ではより特徴的な場面を用いて比較するため、6つの着装基準のうち2つを抜粋し用いた。予備調査で回答の傾向が明確であり、松原（2015b, 2016）の調査で他と因子相関が低いものを検討し、社会的規範と個人的嗜好を重視する着装場面を選択した。

Ⅲ. 本調査

1. 方法

調査対象

20代から30代の社会人720（男360、女360）名だった。平均年齢は30.73（SD4.96）歳だった。

調査日と手続き

2017年6月リサーチ会社への委託によるインターネット調査を行った。

手続き

調査協力者には、Figure 1の順序で質問紙に回答するよう求めた。調査協力者への負荷を配慮し、ひとりにつきひとつの着装場面と着装を提示した。心理状態は最初と最後に一度ずつたずね、自己受容、状態不安、対人的疎外感を測定した。それぞれの質問項目をTable 8から10に記した。自己受容は平石（1990, 1993）の自己肯定意識尺度より自己受容に該当する5項目を抜粋した。状態不安は清水・今栄（1981）のSTATE-TRAIT ANXIETY INVENTORYより状態不安に該当する20項目を抜粋した。対人的疎外感は杉浦（2000）の対人的疎外感尺度より因子負荷量の高い10項目を抜粋した。

はじめに心理状態を測定した後、着装場면을提示した。着装場面は予備調査でえられた社会的規範の「冠婚葬祭の場面」か、個人的嗜好の「ショッピングやレジャーなどの余暇活動場面」のいずれかを示した。着装場면을提示し具体的に想像するよう求めた後、示した場面で重視された着装基準を確認するために、着装基準尺



Figure1 調査の順序

Table8 自己受容の質問項目

01. 自分なりの個性を大切にしている
02. 私には私なりの人生があってもいいと思う
03. 自分の良いところも悪いところもあるままに認めることができる
04. 自分の個性を素直に受け入れている

Table9 状態不安の質問項目

01. 平静である (▲)
 02. 安心している (▲)
 03. 固くなっている
 04. 後悔している
 05. ホットしている (▲)
 06. 動転している
 07. まずいことが起りそうで心配である
 08. ゆったりした気持ちである (▲)
 09. 不安である
 10. 気分がよい (▲)
 11. 自信がある (▲)
 12. ピリピリしている
 13. いらいらしている
 14. 緊張している
 15. リラックスしている (▲)
 16. 満足している (▲)
 17. 心配である
 18. ひどく興奮しろうばいしている
 19. ウキウキしている (▲)
 20. たのしい (▲)
- ※▲は逆転項目

Table10 対人的疎外感の質問項目

01. 自分の居場所がないように感じる
 02. 私は一人ぼっちであると感じる
 03. 何かに縛られ自由に動けないようだ
 04. 本当の自分を理解されているように感じる (▲)
 05. 何かに追い詰められているような感じを持つ
 06. うちとけて話ができる人は私にはあまりいないように思う
 07. 私には本当に理解し合える人はほとんどいないように思う
 08. 自分はやさしい人々に囲まれて決して一人ではないと思う (▲)
 09. みんなが冷たい目で私を見ているようだ
 10. 何かにせきたてられている感じがする
- ※▲は逆転項目

度（松原，2015a, b, 2016；Table 1）から社会的規範と個人的嗜好に該当する7項目を抜粋し、評価を求めた。回答は心理状態も含め、「1：全くあてはまらない」から「5：非常にあてはまる」の5件法だった。

着装場面に対する評価の回答を求めた後、次の3つの着装的うちいずれかひとつを提示した。ひとつめは提示した着装場面から逸脱した着装である。たとえば社会的規範場面では社会的規範から逸脱した着装的の教示文は「自分が冠婚葬祭の場面（着装場面）で礼儀を軽んじ、非常識な衣服を着用している（着装場面から逸脱した着装）ことを想像してください…」となった。ふたつめは着装場面に適した着装である。みつめに、異なる着装場面の基準から逸脱した着装を提示した。たとえば社会的規範場面では個人的嗜好から逸脱した着装を提示した。調査協力者に状況をできるだけ具体的に場面や着装を想像するよう求めた後、もう一度心理状態についてたずねた。

分析方法

使用した尺度の構造を確認するため、主成分分析あるいは主因子法による因子分析を行った。その後、着装場面で重視された着装基準を検討するため、着装場面ごとにt検定を行った。そして着装場面と着装を提示する前後の値の差をt検定で検討した。最後に着装と着装場面、性別を独立変数とし、着装場面や着装を提示する前後の心理状態の変化量について3要因分散分析を行った。多重比較の際はBonferroni法を用いた。

2. 結果

尺度の構造確認

調査で用いた自己受容、状態不安、対人的疎外感、着装基準の尺度の構造について確認した。自己受容について主成分分析を行ったところ、着装場면을提示する前と後とともに1因子構造が確認された。Cronbachの α 係数は.83と.86だった。

状態不安に対し主成分分析を行った。その結果、逆転項目のみが集まった因子を含む3因子構造が抽出された。3つの因子間相関は.26から.50と中程度であり、これらをひとつにまとめることは難しいと判断した。そこで逆転項目である10項目を削除し、主因子法promax回転にて改めて分析を試みたところ、2因子構造が抽出された。着装場面と着装を提示する前と後で因子構造のずれが2項目生じたため、これを削除し、残りの8項目を以降の分析対象とした。第1因子は「不安である」「後悔している」「心配である」「まずいことが起こりそうで

心配である」「固くなっている」の5項目で構成されていた。気がかりで気を揉むさまに関する項目だったことから懸念因子と命名した。第2因子は「ひどく興奮しろうばいしている」「いらいらしている」「ピリピリしている」の3項目で構成されていた。張り詰めた様子に関する質問だったことから緊張因子と命名した。それぞれのCronbachの α 係数を算出したところ、着装場면을提示する前の懸念因子は.86で提示後は.86だった。緊張因子は.82と.81だった。第1因子と第2因子の因子間相関は着装場面提示前が.58、提示後が.56だった。

対人的疎外感について検討した。主成分分析を行ったところ、逆転項目のみ第2因子として抽出された。因子間相関が-.02と-.21と弱い値であり、尺度の意図する内容を逆転させた項目と判断できなかったため、本研究では逆転項目の2項目を削除し、再度主成分分析を行った。その結果、1因子構造が抽出された。Cronbachの α 係数は着装場面の提示前が.92、提示後が.93であった。

着装基準尺度について検討した。主因子法promax回転を行ったところ、社会的規範と個人的嗜好に関する項目で分かれた2因子が抽出された。因子間相関は.26だった。社会的規範の α 係数は.84で、個人的嗜好は.87だった。

着装場面の特徴

調査協力者に提示された着装場面が正しくイメージされているかを確認するため、着装場面の特徴について検討した。提示された社会的規範場面と個人的嗜好場面について、着装基準尺度に回答を求めた。因子ごとの平均値を算出し、各場面に対する評価の差を検討した。冠婚葬祭を提示した社会的規範の場面では個人的嗜好は3.08だったのに対し社会的規範は3.90で、社会的規範の方が高い値であった（ $t(179)=9.11, p<.001$ ）。個人的嗜好場面では、個人的嗜好が3.87、社会的規範が3.32で、個人的嗜好の方が高い値であった（ $t(179)=8.78, p<.001$ ）。

心理状態の変化量

着装場面と着装を提示する前後に測定した自己受容、懸念、緊張、対人的疎外感の差について検討した。平均点と標準偏差をTable 11に記した。分析は、着装場面ごとに着装と性別を分けて行った。

社会的規範場面で社会的規範から逸脱した着装を想像させた場合は、男性の自己受容が-0.77低下し、懸念、緊張、対人的疎外感がそれぞれ0.41、0.31、0.48上昇した（自己受容： $t(29)=4.29, p<.001$ ；懸念： $t(29)=2.43, p<.05$ ；緊張： $t(29)=2.42, p<.05$ ；対人的疎外感： $t(29)$

Table11 着装場面と着装提示前後の値

着 装 場 面	着 装 質 問 の タ イ ミ ン グ	社会的規範						個人的嗜好					
		逸脱 社会的規範		逸脱 個人的嗜好		適合 社会的規範		逸脱 社会的規範		逸脱 個人的嗜好		適合 個人的嗜好	
		前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後
受 自 容 己	男性	3.63 (.70)	2.86 (.89) ***	3.16 (.82)	2.83 (.73) **	3.55 (.76)	3.05 (.86) **	3.48 (.96)	3.08 (.88) *	3.44 (.68)	3.18 (.84) *	3.59 (.69)	3.53 (.71)
	女性	3.84 (.77)	3.29 (.98) **	3.94 (.65)	3.20 (.76) ***	3.48 (.63)	3.22 (.65)	3.78 (.86)	3.07 (1.05) ***	3.53 (.90)	2.92 (.93) **	3.38 (.94)	3.58 (.82)
懸 念	男性	3.05 (.90)	3.46 (.84) *	3.03 (.91)	3.22 (.80)	2.93 (.83)	2.81 (.83)	2.89 (.86)	3.55 (.93) **	3.31 (.94)	3.19 (.94)	2.95 (.81)	2.79 (.91)
	女性	3.21 (.87)	3.65 (.72) *	2.81 (.78)	3.17 (.54)	2.94 (.76)	2.88 (.61)	3.21 (.95)	3.51 (.83)	2.89 (.87)	3.51 (.91) **	2.98 (.96)	2.73 (1.11)
緊 張	男性	2.81 (.98)	3.12 (.81) *	2.76 (.91)	3.07 (.80)	2.59 (.88)	2.72 (.94)	2.39 (.98)	3.14 (1.03) **	2.99 (.89)	3.03 (.97)	2.70 (1.00)	2.69 (.83)
	女性	2.76 (.96)	3.30 (.85) *	2.47 (.87)	2.82 (.68) *	2.59 (.82)	2.51 (.64)	2.63 (.91)	2.83 (.93)	2.62 (.99)	2.94 (.89)	2.68 (.89)	2.23 (1.06) *
疎 外 人 感 的	男性	2.84 (.83)	3.31 (.81) **	2.94 (.97)	3.20 (.92)	2.78 (.82)	2.70 (.91)	2.59 (.93)	3.38 (.81) ***	3.00 (.96)	3.02 (.98)	2.69 (.85)	2.71 (.95)
	女性	2.87 (1.00)	3.35 (.85) *	2.55 (1.01)	2.93 (.83)	2.72 (.76)	2.66 (.59)	2.90 (1.00)	3.23 (.89)	2.73 (.97)	3.05 (.96)	2.89 (.94)	2.53 (1.06) *

()は標準偏差

*... $p < .05$, ***... $p < .01$, ****... $p < .001$

=3.59, $p < .01$)。女性も同様に自己受容が-0.55低下し、懸念が0.43、緊張が0.54、对人的疎外感0.49が上昇した(自己受容: $t(29)=2.94$, $p < .01$; 懸念: $t(29)=2.14$, $p < .05$; 緊張: $t(29)=2.51$, $p < .05$; 对人的疎外感: $t(29)=2.38$, $p < .05$)。個人的嗜好から逸脱した着装では、男性は自己受容のみ有意差がみられ-0.33の低下がみられた(自己受容: $t(29)=2.78$, $p < .01$; 懸念: $t(29)=1.02$, $n.s.$; 緊張: $t(29)=1.78$, $n.s.$; 对人的疎外感: $t(29)=1.39$, $n.s.$)。女性では自己受容と緊張に有意差がみられ、自己受容が-0.74低下し緊張が0.36上昇した(自己受容: $t(29)=4.99$, $p < .001$; 懸念: $t(29)=2.01$, $n.s.$; 緊張: $t(29)=2.59$, $p < .01$; 对人的疎外感: $t(29)=2.00$, $n.s.$)。社会的規範に適合した着装では、男性の場合、自己受容のみ有意であり、-0.50の低下がみられた(自己受容: $t(29)=3.36$, $p < .01$; 懸念: $t(29)=0.89$, $n.s.$; 緊張: $t(29)=0.84$, $n.s.$; 对人的疎外感: $t(29)=0.75$, $n.s.$)。女性では有意な結果はみられなかった(自己受容: $t(29)=1.69$, $n.s.$; 懸念: $t(29)=0.38$, $n.s.$; 緊張: $t(29)=0.44$, $n.s.$; 对人的疎外感: $t(29)=0.42$, $n.s.$)。

個人的嗜好場面における心理状態の差についても検討した。男性が社会的規範から逸脱した場合、自己受容が-0.41低下し、懸念が0.66上昇し、緊張が0.76上昇し、对人的疎外感が0.78上昇した(自己受容: $t(29)=23.1$, $p < .05$; 懸念: $t(29)=3.00$, $p < .01$; 緊張: $t(29)=3.40$, $p < .01$; 对人的疎外感: $t(29)=4.18$, $p < .001$)。女性は自己受容のみ有意であり、-0.72低下していた(自己受容: $t(29)=4.44$, $p < .001$; 懸念: $t(29)=1.48$, $n.s.$; 緊張: $t(29)$

=1.02, $n.s.$; 对人的疎外感: $t(29)=1.51$, $n.s.$)。個人的嗜好から逸脱した着装を想像させた場合、男性は自己受容が-0.27低下した(自己受容: $t(29)=2.11$, $p < .05$; 懸念: $t(29)=0.98$, $n.s.$; 緊張: $t(29)=0.38$, $n.s.$; 对人的疎外感: $t(29)=$, $n.s.$)。女性では自己受容が-0.62低下し、懸念が0.61上昇した(自己受容: $t(29)=2.76$, $p < .01$; 懸念: $t(29)=2.87$, $p < .01$; 緊張: $t(29)=1.31$, $n.s.$; 对人的疎外感: $t(29)=1.55$, $n.s.$)。男性が個人的嗜好に合った着装を想像した前後で、有意な変化はみられなかった(自己受容: $t(29)=0.79$, $n.s.$; 懸念: $t(29)=1.77$, $n.s.$; 緊張: $t(29)=0.14$, $n.s.$; 对人的疎外感: $t(29)=0.29$, $n.s.$)。女性は緊張が-0.44下がり、对人的疎外感が-0.36上昇した(自己受容: $t(29)=1.14$, $n.s.$; 懸念: $t(29)=1.22$, $n.s.$; 緊張: $t(29)=2.71$, $p < .05$; 对人的疎外感: $t(29)=2.29$, $p < .05$)。

着装、着装場面、性別による心理状態の変化

心理状態の変化量を求めるために着装場面提示後から提示前を減じ、心理状態の変化量を算出した。着装場面と着装を提示した後が値が高いとき、算出結果は正になる。

着装、着装場面、性別による心理状態の変化量の違いについて検討するため、3要因分散分析を行った。

自己受容について検討した。分析の結果、性別と着装の交互作用がみられた(Table 12; Figure 2)。そのため単純主効果の検定を行った。個人的嗜好から逸脱した着装をしている場合に性差がみられた。男性は-0.30、女性は-0.68で、女性の方が男性より大きく自己受容が

低下していた。また着装の差は多重比較の結果、女性にのみみられ、個人的嗜好に適合している場合 (0.19) と個人的嗜好から逸脱した着装 ($p<.001$) や社会的規範から逸脱 (-0.63; $p<.001$) している場合に差がみられ、着装が着装基準から逸脱しているときに大きくネガティブな変化をみせていた。

懸念について検討した。その結果、着装の主効果が有意であった (Table 13; Figure 3)。多重比較の結果、社会的規範から逸脱した着装 (0.45; $p<.001$) や個人的嗜好から逸脱した着装 (0.26; $p<.05$) は、個人的嗜好に適合した着装 (-0.20) と比較して懸念が高まっていることが分かった。また、社会的規範から逸脱した着装と適合した着装 (-0.09) の間にも差がみられ、逸脱した着装の方が、懸念が高まることが分かった ($p<.01$)。

緊張について検討した。性別×着装場面×着装の2次交互作用が有意だった (Table 14; Figure 4)。そのた

め、単純交互作用の検定を行った。

性別ごとに着装場面×着装の単純交互作用を検討したところ、男女ともに有意な結果となった。そのため、男性と女性それぞれに対し、着装場面と着装ごとに単純・単純主効果の検定を行った。男女ともに個人的嗜好場面で着装の違いによる差がみられた。多重比較を行ったところ、男性では社会的規範から逸脱した着装 (0.76) と個人的嗜好から逸脱した着装 (0.04) の間に差がみられ、社会的規範から逸脱した着装の方が緊張が高まっていた ($p<.01$)。また社会的規範から逸脱した着装と個人的嗜好に適合した着装 (-0.01) の間にも緊張に有意差がみられ、社会的規範から逸脱した着装を提示した群の方が緊張が高かった ($p<.01$)。女性では、個人的嗜好場面で着装の違いによる差がみられた。多重比較を行ったところ、女性では社会的規範から逸脱した着装 (-0.44) と逸脱した着装 (0.32) をした場合に差がみられ、適合した着装では緊張が低下していた ($p<.01$)。着装場面による違いに

Table12 自己受容の分散分析結果

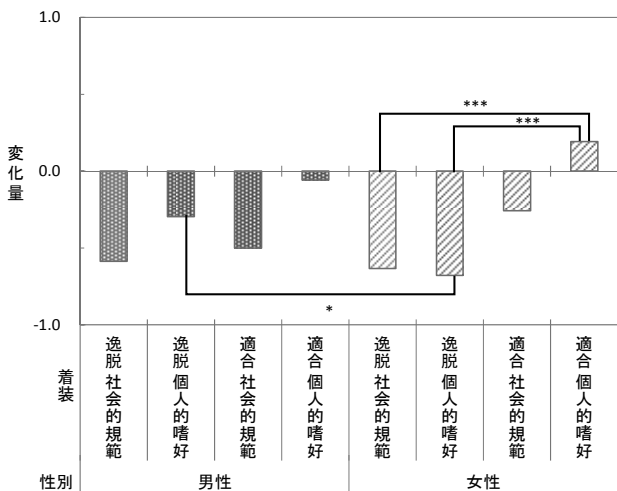
	SS	DS	MS	F	
性別	0.03	1	0.03	0.03	n. s.
着装場面	0.53	1	0.53	0.69	n. s.
着装	15.72	3	5.24	6.87	***
性別×着装場面	0.79	1	0.79	1.03	n. s.
性別×着装	6.23	3	2.08	2.72	*
性別(男)×着装	6.67	3	2.22	2.91	*
性別(女)×着装	19.26	3	6.42	8.42	***
性別×着装(逸脱 社会的規範)	0.06	1	0.06	0.08	n. s.
性別×着装(逸脱 個人的嗜好)	4.41	1	4.41	5.78	*
性別×着装(適合 社会的規範)	0.88	1	0.88	1.15	n. s.
性別×着装(適合 個人的嗜好)	0.94	1	0.94	1.23	n. s.
着装場面×着装	0.00	1	0.00	0.00	n. s.
性別×着装場面×着装	1.31	1	1.31	1.72	n. s.
誤差	265.46	348	0.76		
修正総和	293.58	359			

* $p<.05$, *** $p<.001$

Table13 懸念の分散分析結果

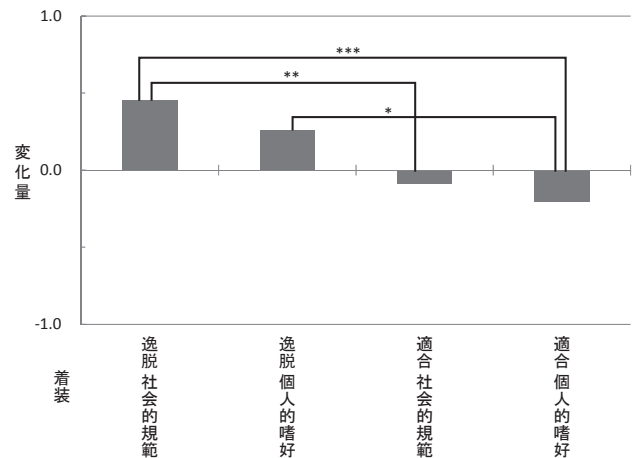
	SS	DS	MS	F	
性別	0.48	1	0.48	0.51	n. s.
着装場面	0.02	1	0.02	0.03	n. s.
着装	22.79	3	7.60	8.05	***
性別×着装場面	0.13	1	0.13	0.14	n. s.
性別×着装	6.28	3	2.09	2.22	n. s.
着装場面×着装	0.11	1	0.11	0.12	n. s.
性別×着装場面×着装	3.36	1	3.36	3.56	n. s.
誤差	328.57	348	0.94		
修正総和	361.88	359			

*** $p<.001$



* $p<.05$, *** $p<.001$

Figure2 自己受容の変化



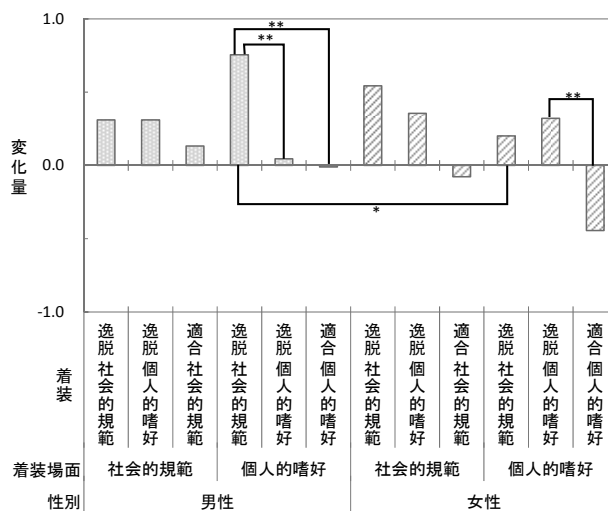
* $p<.01$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

Figure3 懸念の変化

Table14 緊張の分散分析結果

	SS	DS	MS	F	
性別	1.65	1	1.65	1.81	n. s.
着装場面	0.15	1	0.15	0.17	n. s.
着装	19.72	3	6.57	7.23	***
性別 × 着装場面	1.16	1	1.16	1.27	n. s.
性別 × 着装	3.65	3	1.22	1.34	n. s.
着装場面 × 着装	0.60	1	0.60	0.66	n. s.
性別 × 着装場面 × 着装	3.92	1	3.92	4.31	*
性別 (男) : 着装場面 × 着装	8.47	3	2.82	3.11	*
着装場面 (社会的規範) × 着装	1.25	3	0.42	0.46	n. s.
着装場面 (個人的嗜好) × 着装	11.73	3	3.91	4.30	**
着装場面 × 着装 (逸脱 社会的規範)	2.96	1	2.96	3.26	n. s.
着装場面 × 着装 (逸脱 個人的嗜好)	1.07	1	1.07	1.17	n. s.
性別 (女) : 着装場面 × 着装	18.98	3	6.33	6.96	***
着装場面 (社会的規範) × 着装	6.12	3	2.04	2.25	n. s.
着装場面 (個人的嗜好) × 着装	13.40	3	4.47	4.91	**
着装場面 × 着装 (逸脱 社会的規範)	1.78	1	1.78	1.96	n. s.
着装場面 × 着装 (逸脱 個人的嗜好)	0.02	1	0.02	0.02	n. s.
着装場面 (社会的規範) : 性別 × 着装	1.51	3	0.50	0.56	n. s.
着装場面 (個人的嗜好) : 性別 × 着装	8.60	3	2.87	3.16	*
性別 (男) × 着装	10.97	3	3.66	4.02	**
性別 (女) × 着装	13.55	3	4.52	4.97	**
性別 × 着装 (逸脱 社会的規範)	4.63	1	4.63	5.09	*
性別 × 着装 (逸脱 個人的嗜好)	1.16	1	1.16	1.27	n. s.
性別 × 着装 (適合 個人的嗜好)	2.82	1	2.82	3.10	n. s.
着装 (逸脱 社会的規範) : 性別 × 着装場面	4.67	1	4.67	5.14	*
性別 (男) × 着装場面	2.96	1	2.96	3.26	n. s.
性別 (女) × 着装場面	1.78	1	1.78	1.96	n. s.
性別 × 着装場面 (社会的規範)	0.82	1	0.82	0.90	n. s.
性別 × 着装場面 (個人的嗜好)	4.63	1	4.63	5.09	*
着装 (逸脱 個人的嗜好) : 性別 × 着装場面	0.41	1	0.41	0.45	n. s.
着装 (適合 社会的規範) : 性別 × 着装場面	0.67	1	0.67	0.74	n. s.
着装 (適合 個人的嗜好) : 性別 × 着装場面	2.82	1	2.82	3.10	n. s.
誤差	316.25	348	0.91		
修正総和	347.95	359			

*... $p < .01$, **... $p < .01$, ***... $p < .001$



*... $p < .01$, **... $p < .01$, ***... $p < .001$

Figure4 緊張の変化

ついて検討したところ、男女ともに有意な差はみられなかった。

次に、着装場面ごとに性別×着装の単純交互作用について検討した。個人的嗜好場面において有意な結果がえられた。性別あるいは着装ごとに単純・単純主効果の検定を行ったところ、個人的嗜好場面において社会的規範から逸脱した服装をしていた場合、性差がみられた。男性(0.76)の方が女性(0.20)より緊張が高まっていることがわかった($p<0.05$)。個人的嗜好場面における性別ごとの着装による差について検討したところ、男女ともに有意差がみられた。そのため多重比較を行った。その結果男性では、社会的規範からの逸脱(0.76)と個人的嗜好からの逸脱(0.04)には差がみられ、社会的規範から逸脱の方が高い値であった($p<0.01$)。また、社会的規範からの逸脱と個人的嗜好に適合した着装の間にも差がみられ、逸脱の方が大きく緊張していた($p<0.01$)。女

性では個人的嗜好場面において、個人的嗜好からの逸脱(0.32)と適合(-0.44)には差がみられた($p<0.01$)。前述のとおり、個人的嗜好に合った着装では緊張が低下し、逸脱条件では高まっていた。

着装別に着装場面×性別の単純交互作用について検討した。社会的規範から逸脱した服装をしている場合に有意だったため、性別あるいは着装場面毎に単純・単純主効果の検定を行った。性別を分けて検討したところ、有意な結果はえられなかった。着装場面を分けて検討したところ、個人的嗜好場面において性差がみられた。この組み合わせは前述のとおりで、男性の方が高い緊張であった。

対人的疎外感について検討した。着装の主効果が有意だったため、多重比較を行った(Table 15; Figure 5)。その結果、社会的規範からの逸脱(0.52)と社会的規範への適合(-0.07; $p<0.001$)や個人的嗜好への適合(-0.17; $p<0.001$)には差がみられ、社会的規範から逸脱した際に対人的疎外感が高くなっていた。また、個人的嗜好への適合と逸脱の間でも有意差がみられ、逸脱条件の方が疎外感が高まっていた(0.24; $p<0.05$)。

Table15 対人的疎外感の分散分析結果

	SS	DS	MS	F	
性別	0.56	1	0.56	0.69	n. s.
着装場面	0.09	1	0.09	0.12	n. s.
着装	24.54	3	8.18	10.12	***
性別×着装場面	0.28	1	0.28	0.35	n. s.
性別×着装	3.78	3	1.26	1.56	n. s.
着装場面×着装	0.76	1	0.76	0.94	n. s.
性別×着装場面×着装	1.67	1	1.67	2.06	n. s.
誤差	281.16	348	0.81		
修正総和	313.78	359			

*** $p<.001$

IV. 考察

本研究では、着装場面、着装、性別による心理状態の変化量について検討した。予備調査で抽出した着装場面を提示し、その場における着装と併せて想像させた。着装場面と着装を提示する前後に、心理状態を測定した。心理状態の測定には自己受容、状態不安の懸念と緊張、それに対人的疎外感の尺度を用いた。心理状態の変化量を検討するため、前後の値の差について分析した。

社会的規範場面で社会的規範から逸脱した服装を想像させた場合、男女ともに有意な差がみられた。自己受容が下がり、懸念や緊張、対人的疎外感が上昇した。同じ着装場面で個人的嗜好から逸脱した場合にも、男女ともに自己受容が低下した。女性はそれに加えて緊張の上昇がみられた。個人的嗜好場面でも同様の結果がえられた。社会的規範から逸脱した服装を提示した条件では、男性は自己受容が下がり、懸念や緊張、対人的疎外感が上昇した。女性も自己受容が低下した。個人的嗜好から逸脱した服装のときは、男女ともに自己受容が低下した。女性は懸念の上昇もみられた。着装場面と着装が合っている場面で有意な結果が得られたのは次の2点である。社会的規範場面では男性の自己受容の低下がみられた。個人的嗜好場面では女性の緊張と対人的疎外感に

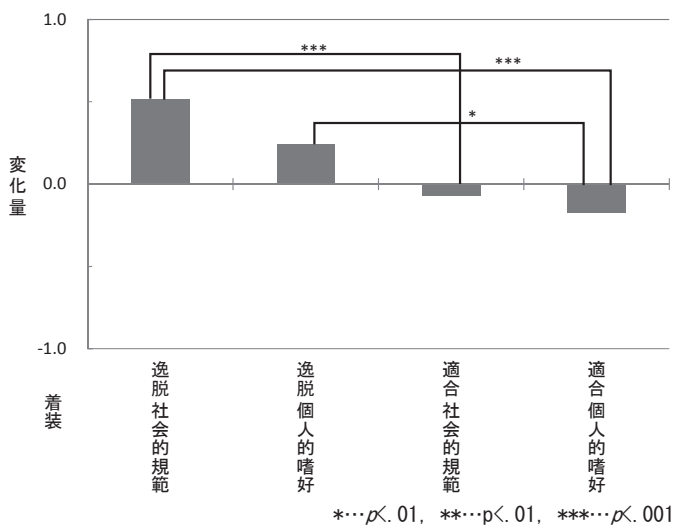


Figure5 対人的疎外感の変化

低下がみられた。

着装場面で求められる着装から逸脱した条件では自己受容が低下し、懸念や緊張、対人的疎外感が上昇するという否定的な変化がみられた。着装場面に適合した着装を想像した条件では、女性は緊張や対人的疎外感が低下し肯定的な変化がみられた一方で、男性は自己受容が下がる結果がみられた。着装場に合った着装では肯定的な変化がみられ、逸脱した着装では否定的な変化がみられるという仮説1は、男性が社会的規範場面で社会的規範に合った着装をした条件での自己受容の値を除き、支持された。統計的に有意ではなかったが、女性と同条件のときにも-0.26の低下がみられた。一方で、着装場に合った着装をしていた際に、緊張や対人的疎外感は有意に下降した。本研究では着装場面と着装による肯定的な心理状態を測るために自己受容を用いたが、他の概念で再度検討する必要があるだろう。

心理状態の変化量の性差について検討した。ファッションに関する意識は女性の方が高いため、男性より女性の方が着装による変化の度合いが大きいと仮説2をたてた。3要因分析を行った結果、性差がみられたのは個人的嗜好からの逸脱した着装を提示された際の自己受容と、個人的嗜好場面で社会的規範から逸脱した際の緊張のみであった。着装場面に関わりなく個人的嗜好から逸脱した着装をしていた場合、女性の方が男性より大きく自己受容が低下した。また個人的嗜好場面で社会的規範から逸脱した場合、男性の方が大きく緊張が高まった。男性の方が大きく変化した条件があり、全体を通して有意差の見られた条件が少なかったことから、仮説2は棄却された。ファッションに関する意識は女性の方が高いが、着装による心理状態の変化量に性差はあまりみられなかった。

最後に、着装場面と着装の組み合わせによる心理状態の変化量について検討した。自己受容に関しては、女性は社会的規範や個人的嗜好から逸脱したときと比較し、個人的嗜好に適合した着装のとき有意に上昇した。緊張については、男性は個人的嗜好場面で社会的規範から逸脱した着装のときに最も高まり、個人的嗜好から逸脱した着装や個人的嗜好に適合した着装と比較し差がみられた。女性は個人的嗜好から逸脱した着装と適合した着装で差がみられ、逸脱時に緊張が高まっていた。懸念では性差はみられず、社会的規範から逸脱した着装と適合した着装で差がみられ、逸脱した場合に値が上昇した。同様に個人的嗜好から逸脱した着装と適合した着装で差が

みられ、逸脱した場合に値が上昇した。対人的疎外感懸念と同様の差がみられ、性差や着装場面の限定はなく、社会的規範から逸脱した着装と適合した着装で差がみられ、逸脱時に値が高まった。また、個人的嗜好から逸脱した着装と適合した着装でも差がみられ、逸脱時に高い値となった。着装場面で重視される基準から逸脱した際に変化量が大きくなると仮説3を立てたが、着装場面が関係した結果は個人的嗜好場面における緊張の値のみで、男性は個人的嗜好から逸脱した着装より社会的規範から逸脱した着装の方が大きく値が高まった。女性は、個人的嗜好から逸脱した着装と社会的規範から逸脱した着装では差がみられなかった。ここから仮説3は棄却されたといえる。本研究では社会的規範と個人的嗜好が重視される2種類の着装場면을提示したが、着装場面ごとに異なる結果がえられたのは、緊張の変化量のみだった。緊張の値は、男性が個人的嗜好場面で社会的規範から逸脱した着装のときに大きく変化していた。着装場面による心理状態の変化量に違いはあまりみられなかったが、男性は社会的規範から逸脱した着装を提示されたとき、懸念や緊張、対人的緊張は他の条件より大きく変化をみせた。つまり、男性は着装場面の特性に関わらず社会のルールから外れた着装をしていることで、否定的な変化が起こることが考えられた。また女性は、個人的嗜好に合った着装をしているときに自己受容が高まり、緊張が低下する傾向がみられた。ただし、緊張の値が他の着装を提示したときより大きく下がったのは、着装場面が個人的嗜好を重視する場合のみだった。男性は個人的嗜好場面で社会的規範から逸脱した着装のときに自己受容、懸念、緊張、対人的疎外感に有意差がみられた。自己受容は下がり、懸念や緊張、対人的疎外感は上昇した。女性は自己受容のみ有意に下がったが、他の心理状態に変化はみられなかった。着装場面に対する反応には性差があることが考えられる。

本研究では着装場面と着装を提示する前後に心理状態を測定し、変化の様子について検討した。着装場面と着装は教示文にて説明し、具体的に想像するように求めた。今回は検討要因が複数あり、調査には多くの協力者が必要であった。そのため実現可能性の高い質問紙法で研究を進めたが、実際に着装場面に立ち、指定した着装をさせた場合と同様の結果がえられる確証はない。今後、条件を絞り込み、実験により着装場面と着装の関係を検討する必要があるだろう。

引用文献

- 阿部 久美子・高木 修・神山 進・牛田 聡子・辻 幸恵 (2000). 着装規範に関する研究 (第3報)——生活場面と着装基準の評定に基づく着装規範意識の構造化—— 繊維製品消費科学, 41(11), 861-867.
- 箱井 英寿・上野 裕子・小林 恵子 (2001). 高齢者の感情・行動意欲の活性化に関する基礎研究 (第1報)——着装時における高齢者の感情・行動意欲の変化に関わる要因の検討—— 繊維製品消費科学, 42(11), 752-759.
- 平石 賢二 (1990). 青年期における自己意識の発達に関する研究 (I)——自己肯定性次元と自己安定性次元の検討—— 名古屋大学教育学部紀要. 教育心理学科, 37, 217-234.
- 平石 賢二 (1993). 青年期における自己意識の発達に関する研究 (II)——重要な他者からの評価との関連—— 名古屋大学教育学部紀要. 教育心理学科, 40, 99-125.
- 福岡 欣治・高木 修・神山 進・牛田 聡子・阿部 久美子 (1998). 着装規範に関する研究 (第1報)——生活場面と着装基準の関連性——, 繊維製品消費科学, 39(11), 702-708.
- 松原 詩緒 (2015a). 大学生における着装基準尺度の研究文化学園大学紀要人文・社会科学部研究, 23, 35-49.
- 松原 詩緒 (2015b). 着装基準尺度の作成の試み——20代を対象とした場合—— 日本応用心理学会大会発表論文集, 82, 58.
- 松原 詩緒 (2016). 着装基準尺度の作成の試み (2)——50代を対象とした場合—— 日本応用心理学会大会発表論文集, 83, 52.
- 松原 詩緒 (2017). 着装の逸脱による心理的变化に関する一研究 日本社会心理学会大会発表論文集, 58, 286.
- 松原 詩緒 (in press). 着装基準に関する研究——性別, 年代, 着装場面に着目して—— 日本繊維製品消費科学会誌
- 内藤 章江・小林 茂雄 (2001). 着装規範に対する着装行動要因の影響 繊維製品消費科学会, 42(11), 43-41.
- 中川 早苗 (1986). 衣生活システムの理論的・実証的研究 (第3報) 女子大生の生活場面と着装基準に関する研究 繊維製品消費科学会, 37(5), 397-403.
- 岡村 好美・井之前 千穂子 (2004). 若者の着装行動の影響要因に関する調査 宮崎大学教育文化学部紀要, 10, 9-18.
- 清水 秀美・今栄 国晴 (1981). STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORY の日本語版 (大学生用) の作成 教育心理学研究, 29(4), 384-353.
- 杉浦 健 (2000). 2つの親和動機と対人的疎外感との関係——その発達的变化——, 教育心理学研究, 48(3), 352-360.
- 鈴木 (2006). 装いと賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との関連 パーソナリティ研究, 14(2), 230-231.
- 辻 幸恵・高木 修・神山 進・阿部 久美子・牛田 聡子 (2000). 着装規範に関する研究 (第5報)——着装規範の親子間の対応性に及ぼす親子関係の影響—— 繊維製品消費科学, 41(11), 876-883.
- 上野 裕子・箱井 英寿・小林 恵子 (2002). 高齢者の感情・行動意欲の活性化に関する基礎研究 (第3報)——老人福祉施設におけるファッションショーが高齢者の情動活性におよぼす影響<高齢者の感想文より>—— 繊維製品消費科学, 43(11), 758-765.
- 牛田 聡子・高木 修・神山 進・阿部 久美子・福岡 近治 (1998). 着装規範に関する研究 (第2報)——場面と基準の関連性を規定する個人差要因—— 繊維製品消費科学, 39 (11), 709-715.
- 牛田 聡子・高木 修・神山 進・阿部 久美子・辻 幸恵 (2000). 着装規範に関する研究 (第4報)——着装規範意識を規定する個人差要因 (自意識・形式主義・社会的スキル)—— 繊維製品消費科学, 41(11), 868-875.
- 安永 明智・野口 京子 (2012). ファッションへの関心と着装行動に関する基礎的調査研究——性別, 年齢, 主観的経済状況, 性格による差の検討—— ファッションビジネス学会論文誌, 17, 129-137.
- 雪村 まゆみ・井上 和子・立岡 浩・小林 恵子 (2003). 職場における着装規範意識の構造に関する研究 (第1報)——着装基準の KJ 法による分析—— 繊維製品消費科学, 44 (11), 644-651.

※本研究は文化学園大学ファッション心理学研究資金 (C) の助成を受けて実施されたものです。

※論文の一部は日本社会心理学会第58回大会 (松原, 2017) にて発表した内容と重複しています。